
北海道大学総合博物館

No.26

ボランティアニュース

2012.9

特別寄稿

中谷宇吉郎先生小伝 ③ 天然雪の研究 —大英博物館と自然史博物館—

名古屋大学名誉教授 樋口 敬二

中谷宇吉郎先生による雪の結晶の研究については、その経緯が中谷宇吉郎著『雪』（岩波新書、1938；岩波文庫、1994、解説・樋口敬二）に述べられているが、1932年、北大理学部の附属室へ行く廊下に置いた小さな実験台上に顕微鏡を据えて、雪の結晶を初めて観察された様子を読んでみると、遠い昔のことなのに、言いようのない懐かしさに似た想いが湧いてくるのは理学部の建物に親しんだ人間の特権だろう。

ところで、この連載の読者が札幌在住の人達であることを考えると、『雪』に関連して紹介したいのは、北大の出身で札幌に住んでおられた雪氷研究の先駆者、加納一郎氏のことである。というのは『雪』の初版が1938年7月に出た時に、雪の結晶の研究史についての記載には加納一郎著『氷と雪』（梓書房、1929）からの引用が多いのに、その出典が明記されていないので、加納氏が中谷先生に申し入れをされ、その結果、1938年12月に出た一部改定版の「序」に「雪華の研究史に就ては、加納一郎氏著『氷と雪』に據るところが多かつた。」という文が加えられたという経緯があるからである。

一例を挙げると、『雪』には、

—雪の結晶を初めて認識した人はアルベルトス・マグヌスで、一二五〇年代のことである。(p24)—

とあるのに対して、『氷と雪』には、

—雪が星状の結晶をなすことを初めて認識したのはアルベルトス・マグヌスといふ人で、時は西暦一二五〇年頃であつた。(p117~118)—

とあり、これでは加納氏が中谷先生に申し入れをしたのも当然だと思われる。

ただ、申し入れがあるまで中谷先生はこの点をご存じなかった可能性もある。というのは、『雪』の「序」に「本當の所は此の本を作るに當つて、小林勇氏が大變力癩

を入れてくれて(中略)、色々な雪の古い文献とか新しい雪国生活の記録とかを持ち出してくれたりしたので、本書の一部は小林氏との共著と云つてよい位色々助力を惜しまれなかつたのである。」と書かれているので、雪の結晶の研究史の部分は小林氏が執筆されたことも考えられるからである。

そのような事情のある『氷と雪』は、出たのが1929年、中谷先生が雪の研究に着手される3年も前で、雪氷に関する日本最初の解説書であり、しかも学者ではなくジャーナリストによって書かれた点が興味深い。加納氏は北大農学部林学科の出身で、北海道庁拓殖部に勤めた後、1928年に出身地の大阪に帰り、朝日新聞大阪本社編集局に入り、文筆活動を始めた最初の仕事として、蒐集した文献に基づいて書いたのが『氷と雪』であり、その中で土井利位の『雪華図説』を初めて紹介した功績は大きい。一方、1927年、札幌でアムンゼンの講演を聞いて感銘を受け、極地の文献を収集し、極地研究や探検史の翻訳、啓蒙によって、探検ジャーナリストの先駆者と言われ、その業績は『加納一郎著作集』5巻(教育社、1986)に括められている。なお、加納氏は札幌では、北大農学部の裏から植物園に向かう道の途中に住まれ、門柱に「霧藻庵」と書かれたお宅には、山岳、極地を目指す若者達が集まり、私も訪ねたことがある。

さて、中谷先生が札幌と十勝岳で行われた天然雪の観測、常時低温研究室で進められた人工雪の実験の成果は北海道帝国大学理学部紀要(Journal of Faculty of Science, Hokkaido Imperial University)に英文の論文14篇として発表され、それらを合本した“Investigations on Snow” by U. Nakaya, Hokkaido University, 1940として刊行された。そして、戦後になって1949年に『雪の研

究』として岩波書店から刊行され、1954 には“Snow Crystals”としてハーバード大学から出版された。私はそのすべてを持っているが、大判の3冊を横積み重ねると、高さは 11 cm を越えるほどの大著である。

そんな大著の『雪の研究』を、日本南極地域観測隊第一次越冬隊の西堀栄三郎隊長が昭和基地まで持参し、中谷先生に長文の電報を送って、雪の結晶形を確認して観測を進めたことは『南極越冬記』(岩波新書、1958)、「南極・北極・熱帯の雪」(『中谷宇吉郎随筆選集』第三巻所収)に記載されている。

ところが、これら多くの刊行物に収録されている雪の結晶の写真とは違った写真が戦後に新しい方法によって撮影されて、世界的に知られるようになり、その成果に私自身が接するという貴重な機会に恵まれた。

それは 1999 年7月、イギリスのバーミンガムで開催された IUGG(国際測地学地球物理学連合)総会に出席の途次、ロンドンに寄った時のことである。ハイパークの南にある自然史博物館(Natural History Museum: NHM)を訪れ、2階の鉱物(Minerals)部門で広い展示室にずらりと並んだ標本箱の列を縫いながら、鉱物、結晶の標本をざっと眺めつつ歩いていた私は、標本箱の一つに雪の結晶の写真が並んでいるのに気付いた。そして、それが、雪の結晶の写真で有名な W. Bentley の写真ではなく、中谷先生が戦前に十勝岳で撮影されたものでもなく、戦後に大雪山で撮影された写真であることが一目で判った。というのは、「斜め照明による影写真の方法」という花島政人先生が発見された新しい照明方法によって撮った写真で、雪の結晶の表面構造が、戦前の写真のように線による模様ではなく、盛り上がるように鮮明に見える写真だったからである。

そんな特徴を一目見て判ったのは、私がそれらの写真が撮影された現場にいたためである。1950 年の2月、大雪山旭岳の山荘・仰岳荘で、雪の結晶の映画の撮影が行われ、私も北大理学部物理学科の1年生ながら中谷先生の格別の配慮によって、それに参加していた。その時に結晶の写真撮影も行われた。

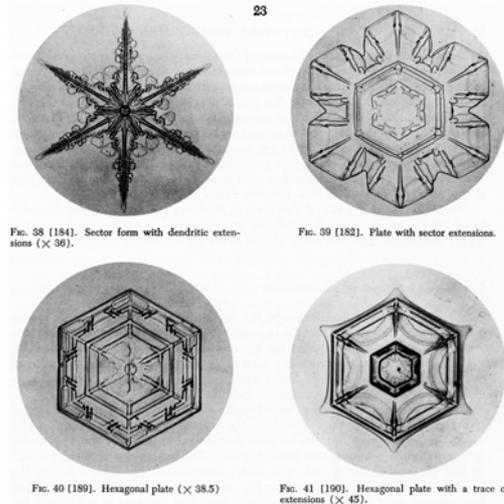
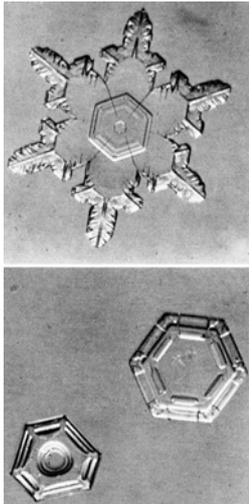
この新しい方法による映画撮影に至る経緯は、「自然の恵み—少国民のための新しい雪の話—」(中谷宇吉郎著『日本のこころ』、文藝春秋新社、1951年に所収)に述べられており、その最後に「斜め照明による影写真の方法」が見付かって、はじめて雪の結晶の構造がはっきり分るようになった。この写真は、たいへん評判がよくて、ロンドンの大英博物館(ブリテイッシュ・ミュージアム)の鉱物部門の主任バニスター博士から、博物館に氷の

結晶の標本として陳列したいから、引伸し写真を四、五枚送ってこないかといって来た。早速送ってやったら、たいへん喜んで、すぐ陳列したという返事があった。なほ雪の結晶もたしかに鉱物の一種である。とにかく日本の雪も大英博物館へはいれば、大いに世界的になったわけである。」という記載がある。

この文章は 1950 年 11 月稿、1951 年5月加筆とあるが、実は丁度そのころ、私自身、中谷先生が「大英博物館から雪の結晶を送れ、とってきたよ。」と嬉しそうに言われた言葉を直接に聞いている。北大理学部物理学科の学生であった時で、研究室のメンバーが一室に集まって昼食をとっていた際のことである。中谷先生が嬉しそうにこう言われたのは、1928 年から文部省の留学生としてロンドンに滞在され、大英博物館というものをよく知っておられたので、そこに自分達が撮った写真が飾られるようになったことに特別の感慨を抱かれたためと思われる。

ところで、中谷先生も大英博物館と書かれ、私もそう記憶していたのに、なぜその写真が大英博物館(British Museum: BM)ではなく、自然史博物館(NHM)に展示されているのか、その疑問は、IUGG 総会の帰途、NHM を再訪し、鉱物部門担当の Peter Tandy 氏に聞いた事情によって、氷解した。Tandy 氏によると、BM の設立は 1753 年、場所は現在のブルーズベリーだが、1881 年に別に BM の自然科学部門の建物がハイパークの近く建てられた。それがそのまま BM から組織上独立して NHM となったのが、1995 年である。だから、中谷先生が雪の写真を送られた 1950 年には、当時の BM の鉱物部門宛であった筈であり、Tandy 氏は「今、ここ NHM にあるこの写真が中谷博士から送られたものであることは間違いない」と断言してくれた。それにしても、私が BM ではなく、NHM を訪れ、雪の写真に気付いたのは幸運という外なく、「人生楽しきかな」という感慨に打たれる。というのは、中谷先生の文章も言葉も忘れ、BM はその前にロンドンに行った時にロゼッタ・ストーンを見るために訪れたので、今度は NHM にしようと思って行った処に雪の結晶の写真があったからである。

ところで、新しい方法によって撮影された雪の結晶の写真は、上述の『日本のこころ』の口絵や 1950 年に刊行された岩波写真文庫7『雪の結晶』に掲載されており、それ以前の写真と比較すると、その違いがよく判るので、両者を転載しておく。



写真の左側2枚が「斜め照明」による写真(岩波写真文庫『雪の結晶』、1950より)で、雪の結晶の表面構造が浮き上がって見える。それに対して、右側4枚の従来の方法による写真(Snow Crystals、1954より)は平面的である。

博物館訪問記

第9回博物館に押しかけよう サッポロビール博物館

図書ボランティア 沼田 勇美

爽やかなサツキ晴れ? の6月2日(土)の午後、北7条東9丁目のサッポロビール園内にある「サッポロビール博物館」(電話 748-1876)を見学した。三々五々に札幌駅北口に集まり、サッポロビール園までの直行シャトルバスに乗った。札幌っ子なら知っている「札幌のビール会社の煙突は、太くて長くてデッカくて、♪ 中から出るのは真っ黒けのけ♪」と謳われたレンガ造りの煙突が我々を迎えてくれた。参加者は女性4人男性4人の計8名。ビール博物館には、札幌農学校開設と同じ1876(電話番号と同じ! 明治9)年の「開拓使麦酒醸造所」設立以来のビール瓶や広告が歴史展示されていた。説明に

よると上記醸造所が在った場所は、現在のサッポロファクトリーだと云う。案内ガイド氏が、美味しいビールの飲み方を伝授して呉れているうちノドの奥がキューンと鳴ってきた。記念撮影して一階に下りると、蔵出しビールが、我々を待っていた。試飲ビールは格安有料だが、チーズなどのおつまみはサービス。1890(明治23)年に建てられ、「札幌苗穂地区の工場・記念館群」の一施設として北海道遺産に選定されているという古めかしいレンガ造りの建屋ビール園での仲間たちの談笑は忘れられないひと時であった。なお、30分ほどのガイドツアーは20分おきに行われている。



前列、左から2人目は筆者沼田



サッポロビールを象徴する太い煙突

エゾシカは、北海道が誇る文化的・経済的価値を持つ自然資源である。鹿肉、鹿皮、鹿角を有効に活用する一方、鹿猟をスポーツとして、また狩猟産業としても活用することにより、中山間地域の活性化に生かすことができる。

2006年、北海道では「エゾシカ保護管理計画」に基づいて「エゾシカの有効活用ガイドライン」を策定した。ここでは「有効活用」＝「個体数調整の一環」とし、欧米同様のディア・マネジメントを実施することが明記されている。あわせて「エゾシカの衛生処理マニュアル」が策定され、北海道の特産品として鹿肉を安全に提供するための、行き届いたマニュアルが作成された。

2007年からエゾシカ協会では、「衛生マニュアル」の基準をクリアした製品に、同協会の推奨マークの使用を認める制度をスタートさせた。これによって安心・安全な鹿肉が得られることになり、エゾシカ肉の販路は拡大し、学校給食でも「地産地消」の一環として用いられ、子供たちにも好評を博している。

1960～70年代、演者は欧米のディア・マネジメントを目の当たりにして、日本でも個体群管理をして、個体数調整のために捕殺した個体は有効活用すべきだと言い続けてきた。1980年代になると、エゾシカの農業被害は年間50億円を超えるに到り、ついに北海道知事は、動物愛護派の反対にめげず、鹿肉の有効活用と組み合わせた農業被害対策の実施を決断した。

1990年に横浜で行われた国際生態学会に参加した欧米のシカ類・クマ類の研究者を北海道に招いた。その折に彼らは、北海道に野生動物の研究機関が必要であること、シカは間引いて個体群管理をするべきであることなどの提言を行ってくれた(『シカ・クマ国際フォーラム北海道1990報告書』)。当時の横路孝弘知事と道庁スタッフは、(おそらくこのフォーラムに励まされて有効活用に踏みきり、さらに道立研究機関に野生動物部門を設置したものと思っている。

欧米のテキスト類を翻訳し、要約して、『シカ類の保護管理—ヨーロッパ・北アメリカにおける理論と実際』(北大図書刊行会,1993)を作ったり、総勢12名で、スコットランド、南ドイツ、ハンガリーの実情を調査し、報告書『エゾシカを食卓へ』(丸善プラネット,1998)を刊行した。1999年に「エゾシカ協会」を設立し、最近になってやっと初期の目標を達成しつつある(『エゾシカは森の幸』,道新,2011)。

欧米では、もともとシカの密度が高い地域に道路網があり、そこに自動車を走らせたために交通事故が多発し、その対策が講じられてきた。わが国では特に北海道において、1980年代末からのシカの増加に伴って、シカとの交通事故対策が課題となった。そこで道路公団北海道支社(当時)の担当者と共に実行委員会を作り、欧米から専門家を招いてシンポジウムを行った(『野生動物の交通事故対策』,北大図書刊行会,1998)。

エゾシカの対策が前進し、有効活用が軌道に乗りつつあるのは、一方で手堅い生態学(個体群動態学)的研究が行われてきたからである(『エゾシカの保全と管理』,北大出版会,2006)。

以上エゾシカでの実践から言えることは、科学的な調査に基づいて対策を練ること、そして常に「現場で勝負」することである。
(大泰司 記)

当日は、約1時間の講演の後、エゾシカ肉のバーベキューに舌鼓を打ちながらの懇談会となり、参加者約14名で楽しいひと時を過ごしました。

大泰司さんは、社団法人エゾシカ協会顧問の肩書を有しているのみならず、エゾシカハンターの名手であり、仕留めたエゾシカを自ら解体処理もするとのことでした。

エゾシカ肉は、エゾシカ協会のホームページでも紹介されているように(<http://www.yezodeer.com/>)、札幌市内のいくつかのスーパーで入手できます。今回の談話会でも、そのようなスーパーのひとつから入手しました。大泰司さんのお話しの中にもありましたが、エゾシカ肉は脂質が少なく、しかも良質で、鉄分が多いのが特徴で、今の健康志向ブームにもかなった食材と言えると思います。脂質が少ない分、いわゆるくせのない、淡泊な味で、調理前の下ごしらえやたれの味によっても、また変わった味わいになると思われます。

最近では、エゾシカによる農業被害の報告も多々耳にします。エゾシカ肉を食する機会を多くして、鹿肉の有効活用と組み合わせた農業被害対策の一助としたいものです。(図書ボランティア 安田正)



エゾシカ肉のバーベキューを囲む懇談会
(右手前が講師の大泰司さん)

平成遠友夜学校創成期の思い出

平成遠友夜学校初代教頭

尾崎 由博 (在イスラマバード、JICA パキスタン)

アッサラーム、アレイクム(パキスタンからこんにちは)。平成 18 年に獣医学部を卒業した尾崎由博と申します。今現在パキスタンのイスラマバードにある JICA (国際協力機構)パキスタン事務所に勤務しています。「平成遠友夜学校」の初代教頭を務めたので、現在も遠友が続いていると聞いて嬉しいです。このたび、編集者のお一人である沼田勇美さんから、当時の思い出を綴ってみては?とのご提案をいただきました。身に余るお誘いとは承知しつつも、「平成遠友夜学校」創成期のよもやま話を楽しんでいただければ幸いです。

平成 17 年の秋頃、獣医学部の 5 年生だった私

があまりに勉学に身を入れないことを見かねた藤田先生が私を呼びました。「新渡戸稲造が創設し、学生ボランティアが貧しい青少年を教育していた『遠友夜学校』を復活させる。俺が校長をやるから、お前は教頭としてコーディネーターをやれ。」勉強しないならその代わりに社会に貢献するような活動をしる、そういう意図もあったのだと思います。今思えば、藤田先生の慧眼は勉学には向かなくとも、多くの人を集め、楽しませるといった「演出家」的役割に向く私の特徴を見抜いていたのかもしれませんが。

こうして藤田先生の発案で始まったのが「平成遠友夜学校」でした。当初は藤田先生が率いていた獣医学部毒性学教室の教員・学生が講師役を務め、一か月ほど試運転。その後、私が大学内の友人、先輩、後輩にも講師役をお願いし、幅広い分野で、およそ 40 回にわたり講座を開催することができました。私は教頭としてすべての講座に立ち会い、司会兼コーディネーターとして貢献することができました。まだまだ草分けの時期で、運営も至らない点が多々あったかと思えます。それでも毎回 30 人以上、多い時は 60 人近い方にご参加いただき、皆様のご協力もあって一年間続けることができたことを、本当にうれしく思います。

学生が講師役を務め、日々の研究テーマを分かりや

すく市民の方に紹介する。「学生」である市民の皆さんは疑問に感じた点を素直に質問し、講師役の学生はその質問にもきちんと答える。これが「平成遠友夜学校」の基本スタイルです。普段自分が勉強している時には見過ごしがちな基本的な知識、研究室では誰もが知っている(ふりをしている!?)用語の本来の意味など普段は指導教員にも指摘されないような質問を受け、学生たちが、たじたじになるシーンもしばしば見受けられました。教える立場になると自分の理解度が試されるということを間近で感じることができ、私も勉強になりました。

一年間私が「平成遠友夜学校教頭」を続けたこと、そして市民の皆様からの温かい感謝の言葉をいただいたことが評価され、卒業を前に北大生にとっては最高の荣誉である「えるむ賞」をいただくこともできました。受賞そのものもうれしい出来事ではあったのですが、何よりも一年目にご参加いただいた皆さんからいただいた感謝や労いのお言葉は今でも私の宝物であり自信の源になっています。

現在は国際協力という舞台で多様な利害関係、思惑、そして発想を持つ関係者の意見をまとめ上げる仕事をしています。一つのプロジェクトを計画し、協力者を募り、そして実践する。これはまさに「平成遠友夜学校」の一年目と同じです。行動の舞台が大学構内、札幌市内から世界に変わっただけです。私が教頭を務めたのはもう6年以上も前の話になりますが、当時の経験が今の仕事に活かしていることは間違いありません。



筆者近影(右) アフガニスタン国境近くのクエッタ市・パロチスタン情報工科大学学長室にて、同校学長と

カルガリー大学での研究生活

化石ボランティア・カルガリー大学大学院地球科学修士課程 田中 康平

私は北大理学部を卒業し、現在カナダのカルガリー大学大学院に留学しています。小林快次先生の下で恐竜の卵に関する卒業研究を行っていた頃から、北大総合博物館の沢山の方のお世話になり、今でもボランティアの皆さまには激励を頂いて留学生活を行っています（いつもありがとうございます）。今回はカルガリーでの研究生活の報告をさせて頂きたいと思います。

カルガリーは冬季オリンピック開催地として有名ですが、実はカナダの恐竜研究の玄関口でもあります。カルガリー近郊には化石産地が多数点在し、毎年多くの古生物学者が発掘調査をしています。私の指導教員であるダーラ・ザレニツキー博士はこの地で恐竜の卵化石を集中的に研究されていますので、恐竜の繁殖生態に興味があった私にはぴったりの留学先でした。

私は現在の研究で、恐竜の抱卵行動の起源を突き止めようとしています。大昔に絶滅した動物の行動がどうしてわかるのか、と疑問に思う方もいるかもしれませんが、実は現在生きている鳥類・爬虫類の行動や卵殻構造をヒントに推測することが可能なのです。膨大な文献資料の中から重要なデータを選び出して分析するのが私の研究スタイルです。まるで古文書を解読し、大昔の宝のありかを発見するようなスリルを味わうことのできる分野だと思っています。



野外調査での筆者

標本調査のためにカナダの博物館を訪れることもあります。博物館のその豊富な収蔵標本にはいつも圧倒

されてしまいます。王立オンタリオ博物館では、100年以上前に収集された鳥の卵標本が分類群ごとに整然と並べられ、息をのむ美しさで私に迫ってきます。標本を集めてきた先人達と、それを守ってきた博物館のおかげで、私の研究が成り立っていることを実感します。



オンタリオ博物館で先祖と対面する筆者

もちろん、調査は現在の動物だけでなく、恐竜の卵化石にも及びます。時には王立ティレル博物館に足を運び、アルバータ南部で化石を収集し、そしてカナダ以外の標本にも目を向けます。私の推測した通りのデータが得られたときは本当に嬉しいですし、予想外の結果は新たな研究の可能性を示唆しています。まだ解明されていない自然界の理を自分の手で明らかにしていく過程は、研究の醍醐味だと思います。

現在、私のパソコンには分析の終わったデータと書きかけの論文原稿があります。やっと暖かくなり、日増しに緑が濃くなる5月、私は今日も研究室にこもってパソコンに向かっていきます（正直に言いますと、これはとても苦痛です）。修士研究もそろそろ大詰め。早く論文として仕上げ、研究成果を皆さんに報告できる日を楽しみにしております。

私のポプラチェンバロ・ボランティア活動(その1)

チェンバロ・ボランティア 石川 恵子

ポプラチェンバロお披露目コンサートをなさったチェンバリスト、水永牧子さんのご紹介で、2008年10月にチェンバロ・ボランティア登録をさせて頂いてまもなく4年になります。

水永さんとは、私が名古屋在住中の2003年に春日井市で催されたコンサートに伺って以来のご縁です。その時使われた楽器は、クラヴサン(チェンバロと同義・仏語)製作者の安達正浩氏製作・所有の「フレンチ」で、二段鍵盤の黒地に金蒔絵の見事な楽器です。その名器を、名古屋の安達氏の工房・アトリエで毎日のように自由に弾かせて下さり、大変有難く楽しい思い出となっています。その時弾かせて頂いたJ・S・BACHの「ゴルトベルク変奏曲」は、全曲演奏すると1時間40分程かかる大曲であり、難曲ですが、今も、これからも飽きることなく、私のライフワークとして弾き続けることになるでしょう。

BACH以前の鍵盤曲は、今はピアノで弾かれることが圧倒的に多いのですが、元来ピアノのない時代にチェンバロのために書かれた曲ですので、当然ながらチェンバロで弾くと、ぴったりで奏法上からも納得できます。北大のポプラチェンバロは、「イタリアン」をモデルに作られています。

ポプラチェンバロは、ご存じのように、2004年の台風により倒れた北大のポプラの倒木から作られ、美しい音色に蘇りました。北大総合博物館の1階、「知の交流コーナー」の片隅に展示されています。楽器の上には、「御手を触れないようにお願いします。」と書かれた立て札が置かれています。「音を聴いてみたい。」との来館者の声を聞くことも度々でしたので、要望にお応えするボランティアをしたいと思い、当時の担当教員の小俣先生にお願いして、私のボランティアの時間を戴きました。



ボランティア風景

第二、第四水曜日の午後3時半～4時迄という先生からのご指示で、2009年7月からボランティアコンサートをさせて頂いています。来館者に、楽器の由来や構造の説明をしたり、BACHの曲等を3,4曲聴いて頂いたり、希望者には鍵盤に触れて頂くなど、来館者との交流を心掛けながら行っています。

ソロの他、他のボランティアの方々とアンサンブルもします。今までの共演者には、ボランティアの大宮司幸枝さん(ソプラノ・道二期会々員)、学生ボランティアの香田亜以さん(ヴァイオリン・現在、独ニュルンベルク音大留学中)、齋藤亮介さん(チェンバロ、卒業)、瀬川信彦さん(チェロ、卒業)の方々と、音楽の良い時間を共有することが出来ました。瀬川さんは、学業、就活、卒論で余裕のない中を練習に度々来てくれて有難いことでした。今は、学生ボランティアの長竹新さん(バリトン・リコーダー・農3)と浜田宏之さん(チェロ・農3)が、授業や実験、サークル活動などで多忙ながら、少しずつでも練習して、時間の空いた時にはコンサートにも参加してくれます。



コンサート・瀬川信彦さん(チェロ)と共演

初めての来館者は、一様にチェンバロとの思いがけない出会いに驚かれ、倒木ポプラから蘇ったチェンバロの美しい音色に感動され、「来て良かった。」「また来たい。」と言って喜んでくださいますので、嬉しくやり甲斐があります。最近では、早く来て待っていて下さる方や、リピーターの方が友人を誘って来て下さることもあります。時期や天候により、少人数の時もあり、大勢の修学旅行生で部屋が一杯になることもあります。来館者には国内外からの旅行者も多く、良い思い出になったと喜ばれます。小さな窓口ながら、世界に広がる貴重な「一期一会」を毎回楽しみにしています。(次号に続きます。)

国立歴史民俗博物館(佐倉市)

地学ボランティア 在田 一則

国立博物館(かつては文部省、現在は独立行政法人国立文化財機構所管)には明治期にできた美術系の東京国立博物館(1872年開館)・奈良国立博物館(1895年)・京都国立博物館(1897年)と100年ぶりにできたという歴史系の九州国立博物館(2005年、太宰府市)があります。その他、“国立”が付く博物館としては、科学技術系の国立科学博物館(1877年、東京上野公園)、民族系の国立民族学博物館(1977年、大阪万博記念公園)、美術系の東京国立近代美術館(1952年、千代田区北の丸公園)・京都国立近代美術館(1967年)・国立西洋美術館(1959年、東京上野公園)、歴史系の国立歴史民俗博物館(1983年、佐倉市)があります。

国立歴史民俗博物館(<http://www.rekihaku.ac.jp>)は千葉県佐倉市の佐倉城址公園の一郭にあり、国立が付いているだけあって、とにかく広い。敷地面積は13万m²、延床面積は3.6万m²ある。因みに北大総合博物館の現在の総面積は約3千m²です。



広い駐車場から正面玄関までの広くゆるい上りのアプローチは結構ありました。展示は、考古・歴史・民俗の3分野を柱としており、原始から現在に至るまでの日本の歴史や文化、それぞれの時代の人々の生活のありさまをゆったりと紹介しています。特徴的なことは、実物資

料の展示のほか、精密な複製品や復元模型、ジオラマが多いことです。各時代の人々の生活の様子や町のたたずまいを示す精密な復元模型はビジュアルで、見ても楽しくあきないです。これらが6つの時代別展示室に分かれており、それぞれの展示室は廊下のプロムナードで結ばれています。廊下がタイムトンネルになっているという趣向です。各展示室は4~7つのサブテーマに分かれ、それぞれが閉じた空間を作っています。

展示室は1階と地階に分かれており、1階には第1展示室(原始・古代:旧石器時代~奈良時代)、第2展示室(中世:平安時代~安土桃山時代)、第3展示室(近世:江戸時代)、地階には第4展示室(民俗)、第5展示室(近代:明治時代~昭和初期)、第6展示室(現代:戦争と経済成長)があります。

私自身は、民俗展示に興味があり、この博物館を訪れたのですが、残念なことに第4展示室はリニューアル工事中で閉鎖されていました。

なお、この博物館には、ボランティアの制度はなく、博物館をサポートする団体である一般財団法人歴史民俗博物館振興会(ミュージアムショップを運営している)に所属する「国立歴史民俗博物館友の会」が会員(HPによると、全国に約1,100名)に対し講座・講演会や見学会などのサービスを行っているようです。また、博物館は国立大学共同利用機関として位置付けられており、考古学・歴史学・民俗学の研究機関として、他の研究機関や大学と共同で研究を行っており、スタッフも教授・准教授・助教制度がとられています。

場所がちよっと不便(京成佐倉駅からバス5分、JR佐倉駅からバス10分、東京駅八重洲口から高速バス(1時間30分)があるとのこと)ですが、近くに行ったおりにはお薦めです。

編集後記

編集委員として紙面構成を担当してきた安田正さんが退任しました、お疲れ様でした。新たに児玉諭さんが加入しました。更に読みやすい紙面作りを目指し、レイアウトを変えてみました。これからも皆様のご意見をお寄せください。

ボランティアニュース

◆編集・発行: 北海道大学総合博物館ボランティアの会(担当者:石川、沼田、星野、永山、児玉)

◆発行日: 2012年9月1日

◆連絡先: 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-4706

ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。<http://www.museum.hokudai.ac.jp>